

本日お読み頂いたマタイによる福音書 13 章には、ひとつ前のページをめくると分かるように、いくつかのイエスの譬え話が書き記されております。譬え話とは、ある事柄を理解できるようにするために、ほかの事柄に置き換えて説明する一種の文学的な表現方法であります。譬え話で聞くことで、聞き手の心のなかに、より具体的にイメージや印象が残るわけです。例えば、イソップ物語では、動物たちが主人公になって、物語がすすんでゆきます。「アリとキリギリス」の物語や、「ウサギとカメ」の物語は有名ですよ。現実的に考えると、ウサギとカメがかけっこをする、などということはありませんけれども、寓話、つまり譬え話の世界ではいかにもありそうな、分かりやすい話として、子どもたちの心を魅了する。記憶にも残る。主イエスは、神の国の物語を、まるでイソップ物語を語るかのように、人びとに分かりやすく話されました。譬えを用いて話すということにかけては、天才的なスキル（技術）を持っておられたのです。

本日お読み頂いた、天の国のたとえでは「天の国は次のようにたとえられる」という定型句が文頭に語られ、そのあとに物語が続いております。平行記事のマルコによる福音書 4 章をみると、「神の国は次のようなものである」とか「神の国を何にたとえようか」とあって、マタイのように「天の国」、あるいは「天国」とは言われていません。なぜ、マタイ福音書は「神の国」と言わないのでしょうか。それは、マタイ福音書が、ユダヤ人を読者として想定して書かれた福音書であって、マタイでは、イエス・キリストの出来事が律法の成就と見られているからです。律法には「主の名をみだりに唱えてはならない」（十戒第 3 戒）という戒めがあります。マタイはマルコが使う「神」という言葉をみだりに使うことを避けて、天という言葉を使ったのです。しかし、「神の国」も「天の国」も、ことばは違っても指し示すものは同じであります。

そこで本日の物語に入っていきます。44 節には、畑の中で宝を見つけた人のことが語られています。天の国は、畑に隠された宝のようなものだと、主イエスは言われるのです。見つけた人は、おそらく小作人または使用人だったのでしょう。当時のこの地方では「宝」即ち、人々は高価なものを素焼きの壺に入れて畑の中に隠すというのが一般的でした。大事な宝を泥棒に盗られないように、そのようにした。この時代のあるラビ（ユダヤ人教師）の言葉に、次のような言葉があります。「お金を貯えるのに、唯一の安全な場所は大地である。」イエスの時代のパレスチナは、自分の庭がいつ何時、戦場になるかも知れないという状況にありました。戦争によって敵国の軍隊から繰り返し被害を受けていた。多くの金品が略奪されていったようです。この時代には、お金や貴重品や重要書類を預かってくれる「貸金庫」が備えられた銀行のようなところは、ありませんでした。人々は高価な「宝物」を守るために、土の中に隠しておいたのです。それがいちばん簡単で、比較的 안전한方法だったのです。（マタイ福音書の 25 章の「タラントのたとえ」でも、土の中にお金を埋めるという僕の話が出ていますね。）戦争によって家を破壊され、住む場所を奪われて難民となったとしても、いつの日かそこに戻ってきてそれを取り戻すことが出来ることを願いつつ、そこから避難しました。そういうわけで、本日の聖書の記述のように、人びとが畑を耕して、宝を掘り当てるといったことは珍しくなかったのです。当時のユダヤのラビによれば、隠された宝について、次のような明確な律法の規定があったといいます。「物を見つけた場合、何が見つけた人のものとなり、何が申告されねばならないか。もしも、散らされた果実や散らされた金を見つけた人がいたならば、それは見つけた人のものである」要するに、物を見つけた場合、拾った人のものになるということです。主イエスは、ここで、畑で宝を見つけるとそれを隠し、あとでそれを自分のものにしようとするこの人のずる賢いやりかたを、ほめておられるではありません。そうではなくて、このたとえ話のポイントは二つあります。第一は、このようなかたちで宝を発見したときの喜びは、他の何のものにも替えがたいほど、この上なく大きいということ、第二は宝を発見した者がその宝を自分のものにするために、つまりその絶大なる価値のゆえに、すべてを売り払って、全てを犠牲にしてその宝を自分のものにするという姿勢です。信仰とはそれくらい大切なものだというのです。

わたしは 20 歳でバプテスマを受けましたが、今年の 9 月で信仰生活 43 年になります。その間、いろいろな場所で、多くの経験をしました。しかし、献身したものとして当然ですが、わたしは信仰をもったことを後悔したことは一度もありません。先日も最初の奉仕先であった神戸教会時代に、とても良いはたらき、

奉仕をしておられた一人の教会員から、お電話がありました。「木村先生ですか？」と話しかけてこられた。そして、懐かしいお名前を聞きました。いま、神戸教会では一部の教会員は礼拝に出席していますが、その他大勢は、自宅にとどまり、オンラインでの礼拝に参加していると言います。その人は、年齢的にみれば、高齢者に該当するということで、礼拝を自粛されていました。今年になってまだ一度も礼拝に出席したことがないそうです。「日曜日はどうされているのですか」と聞くと、パソコンで大泉教会の礼拝を開いて、木村先生の説教を聞いていると言われる。「先生のお話はわかりやすいので、他の人にも紹介したいのです。これまでの説教原稿をあるだけコピーしておいてください。そうしても、いいですか」と言われた。今の時代はそれもありかなと思って、言われるとおりにしました。それとは別に、わたしは嬉しかったのです。もう、何十年もお会いしていない方なのに、礼拝を通しての親しい交わりがすぐに回復するのです。こんな関係が成り立つのは、信仰があるからです。

第一の譬え話でもう一つ心に刻みたいことは、宝を見つけた人は日常生活からかけ離れた所で、この宝物を偶然見つけたわけではなく、毎日の仕事をしている現場、畑で宝物を見つけたということです。農作業の途中、畑を耕しているときに見つけたのでしょう。農機具の先っぽにカチンと壺が当たったのかも知れません。しかし、この人が宝を見つけたのは、畑の土を中まで深く掘っていたからです。彼は、真面目に、しかも手抜きすることなく仕事をしていたのです。その生活のただ中で、彼は宝物を見つけたのです。私たちが神を近くに感じる事が出来る場所は、単に教会だけ、聖なる場所だけではありません。そうではなくて、日常生活のただ中に神がおられるのです。私たちが遣わされた現場で、日ごとのつとめを誠実に、良心的に行う時、そこにキリストの臨在と神の恵みがあることを忘れてはなりません。大切な宝物は、私たちの生活の現場、日常の中にあるのです。天国に入るとは、私たちが特別な衣装を身につけて、特別に非日常的な空間に身を置くことではありません。そうではなく、日々の暮らしのなかで神のみこころを行うことなのです。職場で、家庭で、遣わされた場所で、神の御心をおこなうとき、そこが神の国になるのです。

二つ目のたとえ話にはいりましょう。ここには、良い真珠を探し当てた商人のことが語られています。天の国は、高価な真珠を探し当てた商人のようなものだということです。イエスの時代、真珠は特別に価値のあるものと考えられていました。金銭的に高価ただけでなく、美的感覚においても真珠は美しいと思われていました。当時、真珠が取れる所は、ペルシャ湾の沿岸かアラビア海、または遠く英国（イギリス）でした。商人は世界中を回って、美しい真珠を探し求めていたのです。天国は、その真珠のように美しいものであるとイエスは言われるのです。いや、天国が世界中でいちばん美しいとイエスはいわれるのです。

それはどういう意味でしょうか。天国とは、神のみ心が行われるところ、神の支配が行きわたっているところです。そのようなところは美しいのです。見かけの美しさ、外見のかわやかさが、聖書が言う「美しさ」ではありません。そうではなくて、神さまが喜ばれるようなわざが次々に起こる場所、そこが美しいのです。20歳の時、常盤台教会でバプテスマを受けました。洗礼を受けて、2.3週間たった日曜日の朝、弓倉さんという私より、7、8歳年上だと思われる男性の教会員に礼拝の帰りに呼び止められました。同じ地区の聖書分級に出席していた男子青年のかたです。寡黙でおとなしいかたという印象を持っていました。その方から声をかけられた。何だろうと思って立ち止まると、木村さんのために賛美歌を買ったので、受け取ってほしいといわれるのです。わたしは本当にびっくりしました。礼拝で、教会に備えつけの賛美歌をいつも使っていた私の事を見ていて、新品の賛美歌をプレゼントしてくださったのです。しかも、彼からみれば大変な年下のガキですよ。そのかたは、福祉関係の仕事に従事されていて、クリスチャンホームで育ててこられたかたであることを、後で知りました。まだバプテスマを受けて間もない私、信仰のことなど少しもわかっていない頼りないわたしに、大きくて使いやすく立派な讃美歌を無条件で買ってくださったのです。わたしは、感激してしまいました。

この世界には美しい物がたくさんあります。芸術、音楽、文学、建造物や遺跡、自然や文化財など、かぞえればきりがありません。しかし、本当に美しいのはそれらの作品をつくった作者の心が、神のみ心にかなっていることではないでしょうか。その作者の心が、神の前において美しいことが、美しい作品がうまれる大前提ではないでしょうか。真珠をみつけた男は、畑のなかでたまたま宝をみつけた人物とは異なり、良い真珠をみつけて世界中を探し回っていました。しかし、この二人がとった行動の結果は、同じです。すなわち、それを手に入れるため、すべてを売り払って買ったということです。イエス様に従うことには、すべてを捨て、それまで自分が大事にしていたものを犠牲にして従うことが求められます。けれども、それは決してすべてを無くすことではありません。どんな時にも神さまが共にいて下さり、神の愛の御手が私たちを支

えてくださるという大きな平安が、そこにはあるのです。ゆえに、信仰に生きる喜びは、他の何ものにも替
えることが出来ないのであります。お祈りいたします。